

死を感じ、生を考え、死に向かう

しあわせです感謝グループ 代表／がんサポ喫茶止まり木 店長 久田邦博氏

一つ目の「死を感じ、生を考え、死に向かう」

2001年夏、慢性骨髄性白血病の告知を受けた後、人生で初めて死を意識することになった。治療方法を選択するにあたって重要視したことは生きる目標だった。4人の息子たちのことを考え、10歳の長男が二十歳になるまでの10年間は絶対に生き延びて、父親として大切なことを伝え、息子と酒を飲む夢を果たすと決め、骨髄移植は選択せず薬物療法を選択した。

二つ目の「死を感じ、生を考え、死に向かう」

一年間ほどは生きがいを見出せずただただ生きていた。ある日「死ぬまでは生きている」というメッセージが浮かび、死んだように生きるのは馬鹿らしいことに気付き、死ぬ直前まで思い切り充実した日々を過ごそうと決める。長く生きることよりも一日一日を充実させることを優先し、そのためには寿命が縮むことになることも覚悟し生活に制限を掛けず発病前と同じように自分らしく生きることにした。仕事もプライベートもやりたいことをやり残さないようにスキルアップや課題へのチャレンジに取り組んだ。死が訪れる前に実践する必要があるため、残された時間を大切にして死をも忘れて夢中になって取り組んだ。

三つ目の「死を感じ、生を考え、死に向かう」

出張先のホテルで深夜に目が覚めると、びっしょりと冷汗をかいていた。吐き気と腹痛のためトイレに駆け込んだ。同時に今まで経験したことが無いような気持ちの悪さに襲われ死を意識した。少し落ち着いた状況になったため救急車を呼ぼうと受話器を持ち上げた時に目標としていた10年間を経過した日であることに気がつき受話器を置いた。頭に浮かんだ言葉は「目標を達成できたにも関わらずまだ命乞いするのか。感謝し祝福する日だ」。僕は自分らしく充実して生きため満足した死を迎える準備が出来ていた。この後、ベッドの上で合掌し「ありがとうございます。」と口ずさみながら目を閉じるとすーっと眠りに落ちた。

人生会議は生き方会議

私の人生会議ポスターパロディ版に書いてある表現であり、サバイバー人生から悟ったことである。人生会議はどのように生きたいかを本人と話し合い、それを実現できるように計画を立ててはいかがだろうか？その上で「もし事故等で自分の気持ちが伝えられなくなったとしたらどうするか？」や代理決定者を聞いてみる流れはいかがだろうか？これも本人の生き方を確認していることになる。